

菌床シイタケ経営の特質

— 島根県仁多町の事例から —

九州大学農学部 吉良今朝芳・蔡 正基・
吳 宗徳

1. はじめに

わが国のシイタケ経営を取り巻く環境は大きく変化している。その第一は、原木シイタケ経営の減少である。例えば生産量でみると生シイタケは1988年の82.976tをピークに以後減少に転じ、1991年には78.047tとなった。また乾シイタケは1986年の14.095tをピークに以後減少し、1991年には10.168tと大幅な減少を示している。

第二は、原木シイタケの減少とは対照的に菌床シイタケが急速に伸びている。これも生産量でみると1990年の1.923tが1991年には7.328tと前年対比で3.8倍の伸びで、全生産量の約10%に達している。

第三は、海外におけるシイタケ経営の活発化であり、その主体が菌床栽培である。

以上のような大きな変化を伴って、わが国の伝統的な原木シイタケ経営に対して様々な変化と不安を抱かせている。

そこで今回は菌床シイタケ経営を取り上げ、その特質を明らかにすることを主目的に、最も菌床シイタケ経営で産地化の進んでいる島根県仁多町を選定し、事例分析を行なったので以下報告する。

2. 島根県仁多町の概況

仁多町は島根県の東南端に位置し、中国山地にあって過疎の激しい町である。土地面積は17,864haで、そのうち林野が86%を占め、耕地は8.2%と僅かである。

しかし、おいしい仁多米、仁多牛は有名である。

未利用の広葉樹資源の有効利用と若者の定着化、新たな所得の確保を目的に1986年から菌床シイタケ経営を導入している。

3. 菌床シイタケ経営の現況

菌床シイタケ経営の現況をみると、栽培戸数は1987年の10戸から1991年には28戸に増加している。また生産量は60tから335tに拡大し、年産額も1億300万

円から5億700万円に達している。

①生産組織は、これまで総て個人経営であったが、1992年から森林組合の参入がみられる。

②栽培形態は仁多町の場合、農家が培養から発生まで一貫して行なうシステムではなく、培養と発生を分離した分担システムをとっている。

③生産規模は1棟(50坪、14,000ブロック収容可能)農家が16戸(59%)、2棟農家が9戸(33%)、3棟農家が2戸(8%)となっている。

④施設投資額は1棟農家で約1,000万円、2棟農家で2,300万円、3棟農家で2,900万円となっている。

⑤栽培システムは連続散水発生方式、休養方式、連続浸水方式等に分けられるが、仁多町では連続散水発生方式(空調システムの導入が必要)が採用されている。

⑥培地の形状は円柱型で、仕込み重量は1kgを標準としている。

⑦使用種菌はカネボウKB2001号菌である。

4. 経営の成果

1990年度の菌床シイタケ経営のモデル数値を整理してみると表-1のとおりである。経営規模が2棟の場合粗収益が24,295千円(菌床1個当たり3.3パック、1パックの販売単価が156円)で、その経営費は菌床代、施設等の減価償却費が嵩むことから17,370千円となっている。したがって所得額は6,925千円と少なくなり所得率が28.5%を低い。

経営費の中で大きなウエイトを占めるのは原料費(菌床代)で全体の56.7%、ついで委託手数料の13.4%、動力光熱費の8.4%、減価償却費の8.1%、荷造り運賃の3.0%等であるが、原料費比率の高いのが特徴である。

また1日当たり家族労働報酬は12,720円で、地域の労働賃金に対比して高い。

5. 菌床シイタケの流通

このシイタケを取扱っている仁多町奥出雲椎茸生産組合の年次別生シイタケの出荷実績をみると図-1のと

おりである。市場の強い要請から月別出荷量が平準化している。その結果価格の季節変動は小さくなっている。秀品率が高く、販売単価も高い。

以上から順調に発展しているかにみえる仁多町の菌

床シタケ経営であるが、現実には表-2の規模別生産量をみると明らかなように、栽培農家間の収量格差は大きい。

表-1 1990年度の菌床シタケ経営成果

区分	粗収益	菌床1個 当たり	販売単価	生産費	所得	所得率
二棟栽培農家	2,430	3.3	156	1,737	693	28.5
一棟栽培農家	1,144	3.7	147	869	275	24.0

注) 単位: ①粗収益, 生産費, 所得は万円
 ②菌床1個当たりはパック数
 ③販売単価は円
 ④所得率は%

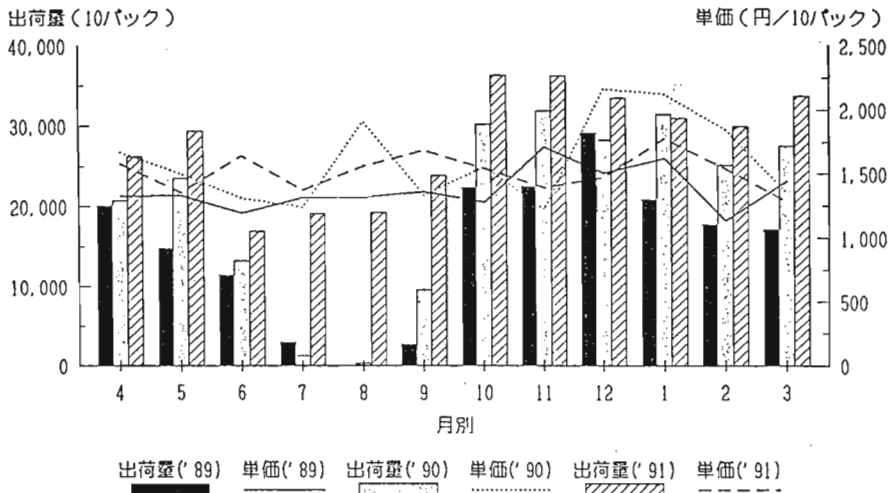


図-1 仁多町奥出雲椎茸生産組合の年度別月別出荷実績

表-2 仁多町の菌床シタケ農家の規模別生産量(1棟当たり)

年間生産量 パック	ハウス1棟		ハウス2棟以上	
	戸数	比率	戸数	比率
40000	2	15.5	0	0
50000	3	18.8	1	9.1
60000	3	18.8	2	18.2
70000	5	31.2	1	9.1
80000	1	6.2	3	27.3
90000	2	12.5	2	18.2
100000	0	0	1	9.1
110000	0	0	1	9.1
計	16	100.0	11	100.0

6. 成果と課題

成果としては①栽培農家の所得が増大したことである。例えば2棟農家で5.4倍, 1棟農家で2.9倍に所得が拡大して。

②後継者(Uターン)の確保がみられること。

③地域の未利用資源の活用ができたこと。

④雇用の拡大(オガ屑工場に男2名, 培養センターに40名, 奥出雲椎茸生産組合に4名, 合計46名)が図られたこと等が上げられる。

一方課題としては①栽培農家をみると農家間の収量、収益に大きな格差が出てきている現状から、今後どのようにして標準化を進めていくかである。

②周年栽培システムの導入で資金負担が増大し、家族の労働負担も大きくなり、健康面から問題である。

③低い収益から、安全で、より効率的な経営感覚が望まれるが、その対応をどう進めていくか。

④菌床シタケ産地が全国各地に生まれつつあり、しかも海外とくに中国、台湾から価格の安い品物が輸入されており、その輸入量が増大している状況を見ると、今後は現在以上に産地間競争の激化が予想されるが、これに対してどのように先進産地として取り進むか大きな課題である。

引用文献

古川久彦編著: 菌床シタケの栽培と経営(林業改良普及叢書No.112), 95~146, 1992